

年間第13主日

ルカ 9・51-62

2022.6.26

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

まず始めに、今日は聖ペトロ使徒座への献金の日になっています。聖ペトロ使徒座というのはバチカンのことですね。フランシスコ教皇様が本当にいろんなところで活躍されていることがいろんなニュースで取り上げられますけれど、教会が本当の意味での世界の平和とか、あるいは、いろんな形で困難にありながらこの世の中の流れから見過ごされている人々への奉仕を率先してなさっている教皇様と共にわたしたちも心を新たにしたい。そして、そういう教皇様の活動を支えるための献金日になっていますので、どうぞよろしくお願いします。

さて、今日の福音は、イエス様が旅に出るという場面だったんですね。ルカの福音書の中の一つの転換の場面ですが、でも、みんなイエス様の旅の目的地を誤解している。なぜならば、目に見える目的地はエルサレムの町。だから、みんなイエス様がエルサレムへ行く、それがこの旅の目的なんだって思っているわけですね。だけど、本当は、イエス様が向かわれるのは天ですね。この世から上げられるご自分の時が来たって、「天に上げられる」って今日の冒頭で福音書が言ってるんだけど、違う言い方をすれば、十字架を通しての死と復活に向かわれる旅なんだ、と。

でも、みんなは地上での移動のことだけしか分からないから、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」って言う人が出たりします。それに対してのイエスの答えは、「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」。なんか意味の分からない答えですけども、イエス様が向かっている目的地はこの世界の中にはないんだという意味ですね。だから、「どこへでも参ります」って言いながら、でも、場所はわたしたちが自分の力では行けない旅なんですよ。だけど分からないので、例えば、「父を葬りに行ってから従います」とか、「家族にいとまごいに行ってから従います」と、「先に行っててください、後から追いつきますから」。でも、そういうわけにはいかない、そんな旅なんだということですよ。

そして、福音書をずうっと順番に読んで行きますと、結局、今日の福音の中に登場してきた人たちだけじゃなくて弟子たちも最後は、このイエス様の死と復活に向かう旅、十字架に向かう旅へ誰も最後までついて行ける人はいませんでした、という話ですよ。神の国にふさわしい者がいて、その者たちとイエス様が一緒に目的地まで到着されました、というストーリーじゃありませんね、福音書は。イエス様のこの旅には、今弟子たちは自分たちは従っていると思うけど、ずうっと読み進めて行けば、みんな最後には逃げ散ってしまう。誰もイエス様と最後まで一緒にいることはできませんでした。

しかし、お一人で死と復活、天に昇られた、目的地に到着されたイエス様は、わたしたち自分の力ではイエス様について来ることができない者たちを迎えに戻ってこられた、って、まだお話が続いて、そして「ルカ福音書」のあと、使徒たちの活動を宣べる「使徒言行録」へと続いて行く。その時には、人々は、まさに天から火が降ってきて、でもその火は、ヨハネやヤコブが今日の福音の中で言っているような、滅ぼしたりする、そういう火じゃない。それは愛の火ですよ。イエス様について行くことができるように、いつもイエス様と一緒にいることができるように一人ひとりを変えている聖霊、それこそが天から降ってくる火なんだ、ということも明らかにされるわけです。そうやって変えられて、そしてイエス様と共に、イエス様の助けのうちに、わたしたちも、あるいは弟子たちも、イエスが向かわれた目的地に、死と復活へと旅をすることができる。変えられて、イエスと共に。そして、その時には「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」って言えるようになる。ただし、「あなたの助けのうちに」ということが括弧してくっ付いている、そういう言い方になるわけですけど。

そして、そのたびに、あとの時代の、キリストを信じるわたしたちも呼ばれているんですよ、というのをいつもミサを通して思い出しますよね。イエス様は、聖霊のうちに、わたしたちを迎えに来てくださって一緒に旅をする、死と復活へと。それは、この世の命の、肉体の命の死とそして永遠の命の復活だけの話ではない。いつもイエスと一緒にいない自分からイエスと一緒にいる自分へ変わる、そういう旅だし、自分中心、自分の中に閉じこもる自分から、自分の中から出て行って他の人につながり、出会い、愛することができる自分へと変わる、そういう魂の旅に招かれているんだということを、わたしたちはいつも思い起こすわけですよ。その時に、本当に「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」。聖霊の助けのうちに。今日もわたしたち一人ひと

りの中にお迎えするイエス様に向かって希望を述べることができますと思います。

だから、わたしたちの信仰の道は、自分の力では歩むことができない。でも、イエス様が、脱落するならば何度でも迎えに来て、いつも共に歩いてくださるんだと、そこに希望を持ちながら、わたしたちも一人ひとりのこの人生の中において、そしてこの世の命が終わるときには永遠の命への死と復活の旅を、イエスと共に歩く、その恵みのうちに信仰生活を続けて行きたいと思います。